

キリスト教の神は、父と子と聖霊なる三位一体の神です。「三位一体」という言葉は、聖書には出てきませんが、父と子と聖霊という名とその固有の働き、さらにその働きが一つであることは、聖書自体が証言するものです。

実際にこの言葉が使われるようになったのは、西方では2～3世紀に生きたテルトゥリアヌスという教父からです。

もともとキリスト教が伝播していった古代地中海世界には、ユダヤ教のように、超越的で唯一な神を信じる宗教が存在しました。他方、自然に内在する超自然的な力や神性を崇拝する自然宗教もいたるところで人々の心をとらえていました。

キリスト教は、創造者で御父なる神が、御子イエス・キリストをこの世界に送り、御子はおとめマリアから人として生まれ、聖霊の働きをもって、わたしたち人間を清め、造り変え、新しい生命に生かしてくださいと教えました。この証言が、聖書には収められています。

ここから、3～4世紀にかけて、三位一体論の教えが、聖書の証言に基づく教会の教えとなり、使徒信条やニカイア信条のような基本信条の信仰内容となりました。基本信条は、例外なく三位一体の神を賛美頌栄する言葉となっています。

4世紀にキリスト教が、ローマ帝国によって公認されると、キリスト教の内部で「正統と異端」の論争が生じます。アレキサンドリアのアレイオスは、御子は神によって創造された一被造物であり、御父よりも少し劣った存在であると主張しました。これに対して、アレキサンドリアの司教アタナシオスは、御父と御子は、同質（ホモウシオス）であると考え、ニカイア信条の文言の形成に貢献しました。

ローマ帝国のキリスト教公認と正統信仰の形成は並行して行われていきます。このような正統説の形成は、古代地中海世界に伝播していった初期のキリスト教会の礼拝や伝道、さまざまな実践と密接に結びついていました。

つまり、三位一体なる神への信仰は、三位一体論という神学説を教会が生み出したというのではなくて、新約聖書の時代にすでに実践されていた教会の祈り、礼拝、洗礼や聖餐を含む教会の生から生み出された教えなのです。聖書の証言と初期の教会の祈りや礼拝が、三位一体の神への信仰を形成する原動力となったと言ってよいでしょう。

キリスト教信仰と他の宗教の信仰を区別する目印となるのは、三位一体の神への信仰です。キリスト教信仰は、三位一体の神への信仰であり、その信仰によって、実際に礼拝を捧げ、祈りを捧げることに他なりません。したがって、礼拝や祈りから三位一体の神の名が消えてしまえば、それはもはやキリスト教の礼拝、祈りではなくなってしまいます。

三位一体の神への信仰とは、イエス・キリストの父なる神以外の神を神としないということです。三位一体の信仰を受け入れると、神を知るためには、キリストを知ることが必要であり、聖霊を理解するためにも、キリストと父なる神との関りを知ることが必須であることを知ります。

洗礼をうけるということもまた、イエス・キリストの父なる神とキリストに、聖霊を通して結ばれることを意味します。

かくして、三位一体の神への信仰は、聖書の諸証言に基づいて、教会の生の中で尊ばれ、受け継がれてきた信仰です。このことは、主日ごとの礼拝説教で明らかにされます。説教もまた、聖書の言葉を通して、生ける御子イエス・キリストを紹介する出来事です。この御子イエス・キリストは、御父なる神の御子であり、聖霊を私たちと教会に遣わすという三位一体の神の働きを担う方なのです。